
永久の光 ~失くした記憶~

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久の光～失くした記憶～

【NZコード】

N9650D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

記憶をなくした少年。何故か水の中で目覚めた。気付くと、浮上
しそこは、泉であった。泉の周りでは、少女達が舞踏会を水面上で
行われていた。しかしその少女達も記憶が無い。自分たちは何者
なのか?それを知る為に、少年と、一人の少女は泉のほとりのお城
へと足を向けるのであった。

#1 出逢い

中途半端な浮遊感が、俺の身体を包み込んでいる。いや、周りが水なのだと感じ取る事ができた時、今自分が置かれている状況をやつと把握した。

水に沈んでいるが何故か苦しくは無い。口からボロボロ息が漏れているのも係わらず何故か苦しくないのである。だけど、このままの状態で居る訳にはいかないのではなかろうかと感じ取れた時、重たい目蓋を開いた。

すると水上からの金色の光が目に入った。

その光は、キラキラと水の中で煌いていて、何故か心地が良く、俺は思わず吸い込まれるかのように、この水の中から体が浮上していくのを感じ取った。

浮上して、俺は、水面に身体を横たえていた。そつまるで、背中に吸盤もあるかの」とく。それはピタリとそこで止まった。

「あの光は、これだつたのか……」

横たわって見上げたままそう一人ごちた。が、何故かその光の主の名前が判らない。青白く、そして、丸い物。それが黒い空に浮かんでいた。でも自分の身近に感じられていたはずなのに、全くその名前が思い出せないのである。

そんなことを考えていると、この水面のどこから、音楽が聴こえて来るのに気がついた。それは、民族音楽のような、独特な聴き慣れない音楽だった。

俺は、その音楽が何なのか?気になつて思わず、視線をそのままそちらに向けた。

そこには、白いサテンのドレスを着た少女達がハープや、管弦楽器を携えかき鳴らし、または唄を歌いながら、水面に輪を描くように跳ねるかの」とく踊っていた。

俺は、思わず、その光景を微笑ましい物に思い、見入ってしまった

た。

その奥には、白くて淡い光を放つた大きなお城が見える。それがとても幻想的だった。

「これは、舞踏会かな？」

俺は、また一人ごちた。

すると、少女達が、俺の気配に気がついたのか？踊っているそのままの勢いで水面を跳ねるようにこちらへと足を運んで来たのである。

「あなた誰？」

一人の透き通るような白い肌の頬に少しソバカスが有る少女がしゃがみこんで俺に問いかけてきた。

「え？ 俺は……」

と言いかけたところで言葉に詰つた。

考えてみれば、自分が誰なのか？その事が判らないのである。

「誰？」

その隣の少女が、追い討ちをかけるように同じく問いかけてきた。

「え……と。判らないんだ……」

記憶喪失？なのかも知れない。

「そう。私達も自分が誰なのか？判らないの。同志ね！」

少しあせ細つた少女が俺の顔を見下ろしてそう言つて笑つた。

「君達も自分が誰なのか、判らないんだ？」

俺は、起き上がりながらそう問いかけた。それを助けるかのように、一人の少女が手を貸してくれた。

「知らなきやいけないことなのかしら？」

「そうなのかしら？」

「やっぱり知っていた方が良いかも知れないわ？」

複数の少女達がそう言つて、ワラワラと俺の所に集まつてきて騒ぎ出した。周りに流れていたはずの音楽も止まつた。しかし、

「そうかしら。知らない方が良い事もあるかも知れないわよ」

一人の少女が、まるで傍観視でもしているかのように、水面から離れた草の上で、白いドレスを腕で抱き込むかのようにして座り込んだままそう言つてきた。

ふわふわ巻き毛の黒髪と、白く透き通つた肌が対比的で青白い光の下かなり魅力的に感じられた。

でもその容姿のわりにかなりさばけてる所がまた、小憎らしい氣もする。だから、

「じゃあ、自分が誰なのか？調べよう！」

俺は提案した。

「知らない方が良いかも知れないのに、調べるの？」

少女は、立ち上がり、俺の方へと歩み寄つた。というか詰め寄つてきて、俺を見上げるかのようにつま先立ちをし、ジッと見上げた。

まるでガンを受けられてるかの様に感じ、俺は、一步退いた。

「な、何だよ？」

「あなた、自分で言つておいて、何を怯えているのよ！そんな事で、自分が誰なのか知りたいの？」

ふつと吹き出しそうな表情で俺を見上げた。怯えてる訳では無い。ビックリしたんだ！と言つてしまおうかと思つたけど止めておいた。

「じゃあ君も、自分が誰なのか？調べようよ！君は怖くないんだろ？」

「な、何よその言い方…」怖くなんか無いわよ！なら、一緒に自分が誰なのか？調べる？多分あるお城に、全てを知る鍵があると思つたんだなと思った、あるお城だった。

「うわ！」

少女は、そう言つてお城のある方角を指差す。此処、泉のほとりを取り巻いている森の中にあるお城。白くボーッと光つている幻想的だなと思った、あるお城だった。

「あそこに行けばわかるといふその根拠は？」

「そう、何故少女はそう思うのか？」

「あのお城、私達が起きている間は在るけど、寝てる間に消えるから。不思議じゃ無い？」

じゃあ何か？神出鬼没なお城という訳か。それは確かに奇妙だ。

「了解！なら今すぐ出発だ！」

俺とその少女は、他の少女達の、止めなよ。と言ひ言葉を大丈夫だから！と言つて、その場を離れた。

森の中は、あの光も遮断するくらい生い茂つている。なので、暗闇を歩く事となる。が、少女の体が仄かに白く光っているのと、何故だか自分が発している仄かな光で道を見誤る事は無い。

「何故君は光つていてるの？」

「それを言つたら、あなたもでしょ？」

言つてるそばから、二人とも疑問符で留まる。どうも、息が合わないコンビだ。きっと、少女もそう思つていてるに違いない。

俺と少女は、言葉少なげにその森の中をズンズンと進む。眼前に聳えるお城を目指して。

そんな時、歩を進める先の草むらから、オレンジ色に光る四つの鋭い光がこちらを見ているのに気が付いた。

「キヤツ」

少女は、お化けでも見たかの様に、俺に飛びついてきたのである。俺は少し照れてしまった。

「驚かなくとも大丈夫だよ。あれは、狐の瞳だよ！」

俺は、必死でしがみついてくる少女に、言い聞かせた。

「狐？それは何？あなたは知つてているの？」

「君は知らないの？」

「知らないわ。あなた、変わつてているのね。自分以外の事は、言葉や物を知つているなんて！」

考えてみれば、変かも知れない。でも、キミだって、知つている事と、知らない事があるじゃないか？

そんな事を思つていると、サクサクと一匹の狐がこちらに近づい

てきた。一匹は、子狐のようである。

「あら、あなた達、あのお城に行くのかい？」

「どうやら、母狐のようである。

「はいそうですが。何か有るのですか？あのお城に？」

俺は、問い返した。

「噂に聞いた所によると、入つたら最後、出られない。って事らしいよ？噂だから、本当かどうかは判らない事だけれども。それでも、行きなさるのかい？」

母狐はそう言った。

「うん。行つて確かめないといけないんだ。あそこで、自分が何なのか？それを知る鍵があるらしいから！」

少女から聞いたままの事、俺はそう言った。

「お姉ちゃん、それで良いの？あのお城、朝には消えて無くなるよ？」

子狐が問いかけてきたのを、

「そりなんだけど、まあ……そつ言つ事だから、仕方ないのよ。負けられないしね、この人に！」

つて、いつの間に勝負してるんだ俺達は？顔が引き攣りそうになつたけど、俺達は、その狐の親子に「さよなら」を言つてその場を後にした。

「あのせ、俺達、いつから勝負してるんだ？」

「あなたが、そう思つてるからでしょ？」

「そんな事思つてないぞ。俺は！」

「あらそり？じゃあ、良いじゃない。私は、そうなのかと思つていただけど？」

「先に、突つかつてきたのは君じゃないか！」

「そりだつたかしら？忘れたわ」

いけしゃーしゃーと話す唇がピンク色に染まつていて印象的だけど、やはり何か気に入らない。こうして話の噛み合わないまま、俺

達は森の中へとさりにズンズンと進む。

お城がだんだんと近くなつてきた様に感じられた。あと少しすると、お城の城壁まで辿り着けそうだ。そんな時、

「おこ、お前達、お城に行くのかね？」

ひょいこり顔を出したのは、山羊のお爺さんだった。

「はいそうですが」

俺は、頷きながらそう言った。

「何しに行きなさる？」

「自分が何なのか？それを探りに行くつもりなのよ」

「今度は、少女が応えた。

「ほほ～記憶を失くされたのか？なら伝説ですと、地下にある、七色の宝石を持ち、最上階にある王冠にその石を埋めると良い。やうすれば、必ずと見えてこひ」

「そんな伝説が有るのですか？さつきの狐の母親は、生きては還れないと言つっていたけれど？」

俺は問いただした。

「まあ、行つて見るとその意味も判る。それでも行きなさるのか？」

山羊のお爺さんは、意味ありげにチラリと俺達を見て、そしてほつほつと笑つた。

「そつすることに意義が有ると思つたから行きますー！」

「なら氣をつけなされ。光には、闇が付き纏つと云つ事を忘れずな

？」

山羊のお爺さんは、忠告だけして草むらに駆け込み去つて行つた。

「どうこいつ意味だらう？な～？」

「そんな事知らないわよ。それでも行くのでしょうか？もつ帰くなつた？」

少女は、あつけらかんと言つた。怖くないのだろうか？とも思つたが、此処で引くのも何だか男らしくないので、

「冗談だろ？行くに決まってる！」

俺は、強がつてそう言い切つてしまつたのである。

#1 出逢い（後書き）

短い作品ですが、お付き合い頂けるとありがたいです。

#2 城と唄

闇は、光に憧れて、光は闇を宥めるが、その先は空と海のようにならない

ついに城壁のある、門の所までやつて來た。
歌声が聴こえる。否、歌声なのか?どちらかと云つて、
唱えている様な声が聴こえてきた。

「あの声は何かしら?」

少女は、少し薄ら寒そうな声色をして、俺に問いかけてきた。でも、俺にもそれは判らない。

「城の中から聴こえてくるな?」

さつきの狐の言葉を思い出して、俺まで身震いしそうな気分だった。

俺達は、お互い顔を見合させながら、薄ら笑いをした。それは、怖くないぞこのやう!って奮い立たせる為の、作り笑い。お互い判つてはいるが、追求する気にはなれなかつた。

「とにかく門の中に入らなきやな?」

厳重に閉まっている門。これを開ける事が出来るのであるうか?と思わせる程、俺達のはるか頭上まである高さの重厚な門である。「こういう時、何か唱えないといけないのかしら?」

少女は、言った。

「開け!」

「何それ?」

「知らないのか?」

「知らないわよ」

あつさり言い切られて、俺はから笑いした。

「んじゃ良い。あるお話の呪文だよ」

「そう。知らなくても生きてはいけるわね」

可愛くない！返事に一々腹を立てても仕方ないので、俺は、扉に力をこめて開けようとした。がしかし、寸とも動こうとしない。

「キミも手伝えよー！」

「か弱い私が力入れても開くわけないでしょ？」

「やつてみてから言えよーこの、天邪鬼！」

俺は、終にカチンと来てそう言つた。それに対して怒つたのか？

少女は、

「手伝つてください。と言ひなさい！」

って、それは何ですか？命令かよ……まるで召し使いの様に扱われて、俺はムッとした。その為、門を脚で蹴り飛ばした。でも、開くわけが無い。

「なあ、眞面目に手伝つてくれないか！」

「それは、力を貸して欲しいと言つ事よね？なら、素直にそう言えば良いじゃない？」

「だから、初めから言つてるだろー！」

「はいはい。判つたから、そうやつて怒るの止めてくれないかなー？」

？

少女は普普通と含み笑いして俺に言つた。

こいつは、俺を何だと思つてるんだろう？只からかつているだけなのか？全く！でも、怒るのも力を使うので止めにした。肩を下ろしてリラックスリラックス。

「じゃあ、押すよ！せえの一！」

と言つ感じで二人してその門を押した。

するとどうだらう？あの開くはずも無かつた門がズズズーっと開いたのである。

少し開いた所で、俺達が通れるだけのスペースを作り出したので、中に入り込む。

中に入ると、白い花で埋め尽くされた、ガーデニングと、お城の階段へと繋がる道に出た。道は、白い蠟燭で整つた炎で揺らめいて

いた。

「さて、行くとするか！」

俺はそう少女に言つと、後ろに居るはずの少女を見る為に振り返つた。が、その後ろにあるはずのもんが綺麗さっぱり消えてしまつていることに気がついたのである。

「おい！門が無いぞ！」

「あら、本当。ビックリね」

少女は言葉こそ驚いた。と取れるが、表情からは余り驚いた風もない。驚いてるのは俺だけであった。

「何をそんなに落ち着いてるんだ？在った物が無くなつたんだぞ！」

俺は、少女の肩を揺すつた。

「気安く触れないでくれない？ちゃんと驚いてるわよ。でも、何があつてもおかしくないでしょ？だつてこのお城消えるんですもの」
あ、そつ言えばそうだった。消えるお城なのだと諭された事に、自分で拍子抜けしてしまつたのである。

「とにかく進みましょ？それが目的なのだから！」

真っ直ぐお城を見据えている少女の姿に、狐に驚いたあの時の少女は此処には居ないと悟つた。此処に居るのは、好奇心の塊の少女なのだとやつと気が付いた俺であった。

お城の階段を上る。回りの蠟燭の炎が、俺達の歩調に合わせて揺らめいていた。それがまた、踊つてるかのようで凄く印象的に瞳に映る。

この階段を上り切ると、そこにはお城の玄関の扉に当たる。

俺達は黙々とその階段を上つた。少女は一体何を考えているのであろうか？俺は不思議でしようがない。足取りはとても軽く見える。あの泉の水面を駆けるかの」とく。

そして、何事も無く、扉の前に立ちはだかった。

「いきげんよう。こいらっしゃいませ、お客人」

扉はいきなり口を開いた。その合図で、扉が開かれた。中は、外からのイメージ通り幻想的な造りをしていた。あらゆる家具は、生活感の無い無味無臭さをかもし出し、誰も住んでないのではないだろうかと思わせるそんな感じがした。そして、白くボーッと光る壁。それが、シャンデリアの光と融合し、より幻想的だった。

俺達は、山羊のお爺さんに言わされた通り、地下を目指す。

「階段を探さないとね？」

俺は少女に言った。すると少女は、珍しく俺に同意した。「それが先決よね？でもこの広いお城の何処に階段があるのか？それを探すのが一苦労じゃない？」

確かに、高い天井に圧倒され、そしてこの幻想世界の中に居るだけ、何だか落ち着かない。だから、余計このお城の構造と言つ物が理解できなかつた。

「一手に分かれる？」

「いや、分かれて探すのはどうかと思う。きっと、迷子になるか、落ち合えないか？のどちらかだよ」

「全く気が小さいわね～だけど確かに、迷子になりそ～……ね。なら、このお城の中から聴こえるあの声を頼りに探ししましょう」

そう言えば、ずっと聴こえていた声が、お城の内部に圧倒されていたため今まで気にならなかつたけれど、考えてみればそれが一番なのかも知れないと思う。

「判つた、そうしよう。でも、それで良いのか？疑問は残るけれどもね」

「だけど、此処で何もしないよりかマシだわ。だつて、口を銜えて此処に居るなんてバカみたいじゃない？」

なんという前向きな発言。それも一理あるのだけど、本当にこの少女は前向きだ。自分が何なのか？それを知った時もいついつ言動が出来るのであらうか？俺には疑問だった。

「判つたら、さっさと行くわよ！」

その言葉に有無を言わせない何かを感じて俺は、情けない事に、

少女の後を追つたのである。

通路を歩く。不思議な事に、このお城は、人が辿つた通路の床に紅い印を付けるとこう変わつた趣向がなされるみたいだ。それが迷わない一つの道標みたいな物。

「ちよつとーそこはさつき辿つたでしょう?全く観察力が無いんだから!」

その言葉で、俺は初めて気が付いたんだけれども。

そんな訳で、声を頼りに少女の歩に合わせて歩く。すると、歩く半ば或る所から、いきなり雰囲気の変わつた通路に出た。そして立ち止まる。そこは、まるで、闇を思わせるほど暗い廊下であった。

「まさかここから先に階段があるとでも思つてゐ?」
俺は問いかけた。

「だつて、変じやない?此処だけ他と違つなんて!」

興味が先走りしているみたいだつた。

「でも、『光には闇が付き纏う』と、あの山羊のお爺さんはずつといたじやないか?やめた方が良いと想つけど……」

此処に来て怖くなつた。何故だらつへこの先に何かとんでもない危険が潜んでいそだ。

「『チャヤ』『チャヤ言わない!』そんな事で、どうするのみ!地下にある宝石をとつてきて、最上階の王冠に埋め込めば良こだけの事でしょ?この先に何が有ろ?と、怖がるような事じや無いじゃない!本當、それでも男なの?」

と言つて、少女は、一気にその通路へと駆け出した。仄かな白い光が暗闇の中に、俺の前からスースと去つていぐ。俺はそれを見失う訳にはいかないと駆け出した。

「何てこと無いじゃない。ただの暗い廊下よー。」

少女は、ケラケラと軽く笑つた。

「だけど、それだけじや無いんじゃないのか?」とは、腐臭がするし、ひょっと変だ

といったそばに、俺は何かに躊躇った。

それは、何かの白骨であった。

「ちょ、まずいよこれ……何か異様だ。引き返さないか！」

しかし、少女は、なんとも思つてないらしい。

「無様ね……」

と、その白骨に向かつてただボソリと呟いた。

「おい！そんな風に言うなよ！もしかすると、いついついつ事だ俺達がなるかも知れないって事だぞ！」

俺は、少女に対して怒鳴った。そんな言い草つて何だ！といつの意頭にあつたのだ。

「危険である事を承知して入つたのでしょ？それは自分に力が無かつた。只それだけの事だと思うわ。何？あなたもそれを肝に銘じているんじゃないの？見損なつたわ」

少女は、立ち止まつたその場を、サテンのドレスを翻して前を向いて歩き出した。

判つてゐるさ。でも、言い方といふものがあるだろ。俺は、まだ納得行かない頭のまま少女に付き添う。それが俺の弱さだと自分で何となく判つた気がする。

それからどうのくらいい歩いだらう？光と闇が廊下を横切つて、縞々の帯のように行く手に立ちふさがつた。

「何だらう。これ？」

俺は、その光を触ろうとした。すると、手が、紅く染まつた。染まつたというより、ただれたと言つ感じだ。でも、痛みは無い。「きつい紫外線？なつかしさ……私は、これに触れられない……」少女は、そう言って、そこに立ち尽くした。

「紫外線に弱いのか？キミ……」

「そうよ。私達は夜活動して、朝には寝るもの」

この少女は、自分のバイオリズムに関してはきちんと把握しているらしい。俺は、そう言つことが判らないといふのに……

「判った。なら、俺の背中のマントの中に入っている。女の子の身体に痣など作るのは可哀相だ……」

怒つても、庇いあつ事へらは出来る。俺は今まで非情じや無いつもりだ。

「借りが出来るわね？」

「勘違いするなよ。借りとかそんなんじゃない。助け合いつつだ

俺は、背中の皿にマントを肩の止め具から外すと、少女の全身に被せた。そして、少女を抱えると、一気にその通路を猛ダッシュ。カンカンと駆ける靴の音とあいまって、あの声が轟く。地下へ下りる階段が近いと言つことなのか？俺は、軽い少女の身体を抱えてそう思った。

#3 ハンビネーション

その通路を通り過ぎると、俺は少女を下ろし、マントを元に戻した。

「顔、真っ赤ね……痛くないの？」

珍しくしおらしい少女の言動に、俺は奇妙な気分に陥った。

「らしくない言葉掛けるんじゃないよ。ホント、らしくない……」

ちよつと照れくさい自分がそこに居た。

そこから、少し行くと、今度は、通路と呼ぶのか?と叫んだりながら、床が岩のように凸凹したところに出た。

「これを歩くのは大変ね……」

「でも歩くしかないんだろ?キミの持論で行くと?」

ちよつとジヨークのつもりで言ったのだが、少女はプクッと膨れつ面をした。判りづらい奴だと思ったが、ま、気にせず一人とも先を急ぐ。

と、途中の岩を越えようとした時、踏んではならない場所だったのか、後方から、「ゴゴゴー」と叫び音と共に、土砂崩れのような砂が俺達目掛けて押し寄せってきた。

「逃げるぞ、急げ！」

先に進んでいる少女のお尻を押した！

「エツチ！」

「ンな事言つてる場合ぢや無いつつーの一良いから急げ！死ぬぞ！」

少女は後方を見てやつと把握したらしく、一目散に、岩を駆け上り、そして、駆け下りた。俺達はそれを繰り返し、最後の岩を越えた。その岩は、この通路の天井ギリギリまで高さが有り、それを超えるのには背中とお腹が引っ付くかと思ったが、危険が後ろから迫つていたため、苦にはならない。その代わり、その岩を越えた瞬間ドツと疲れが出た。一人して、背後の岩にぶち当たるドーンという

音を聞きながら、岩にもたれかかり、ハアハアと息を付いていたのである。

「凄い仕掛けがあつたものだな……死ぬかと思った……」

息継ぎしながら俺は冷汗を拭つた。

「まだこんな事が有るの？もう沢山だわ……」

流石に少女も根を上げかけた。が、スクッと立ち上ると。

「さあ、行くわよ！」

何も懲りてはいないらしい。まあ、どちらにしても、背後がこれじゃ、戻るに戻れない。進むしかないのだ。

そこから先は、お決まりのような罠が仕掛けられていた。石畳を踏むたび矢が飛んでくるは、水が押し寄せてくるは……しかし俺達は何とかそれを掻い潜り、罠から命からがら逃れることができたのである。

そして進んだ先の通路の突き当たりで終に、地下への階段。というのか……実際にはそこに通じる穴を見つける事が出来た。

「これは、此処を下りろ。と言つ事なのだろうか？」

「それしか無いんじゃない？でも、この穴、どうなつているのかしら？」

そう、底が見えない分、空恐ろしい。でも、声が此処から聞こえて来る事だけは確かだ。

「ロープが有れば良いんだけれど……」

そう考えてみても、有るはずが無い。

「それじゃあ、先に私が下りてみる。あなたは後から来る？」「はあ、何故こんなに仕切れるのか？」

「いや、俺が先に行く。キミは、俺が良いといつまでそこ待機してくれないか？」

「こういつときのレディーファーストは間違いだ。危険を伴うなら、俺が先だろ。そう思う。

「俺が下で呼んだら降りてきて良いから。気をつけろよ！」

「あ～ら。格好つけちゃって。良いわ。此処はあなたに譲るから」
そう言つて少女はクスッと笑つた。それは、心から笑つてくれた
ように感じられて、不快な気分にはならなかつた。

「じゃあ、行くよー。」

そう言い残して俺はその穴に脚を入れて中に入つた。入つたは良いが、足元が滑る。気を付けながら、足を踏ん張つたが、終に滑つてしまつた。

「おお！」

ズルつと滑つた足は、僕
ま落ちていつたのである。

「カニ」

と落ちた先は、真っ暗な何もわからない場所だった。此処が地下
？ドシンとお尻から落ちた俺はその痛んだ箇所を擦りながら、回り
を観察した。

「ね～～～大丈夫～～～～！」

遙か頭上から、少女の問い掛けが聴こえた。

「ああ、着いたよー。キリギリ降りておこでよー。かやんと受け止めるか
う〜〜〜。」

頭上の少しだけ明るく見えるところが穴なのだろうと俺は把握しきりに叫んだ。

かのじまへ暫く

「あら、上手く抱きとめないと出来なかつたわね?」

あつけらかんと言つてのけた少女は、その後お腹を抱えて笑つて

いた。

「どいつも。無様で悪かつたな！」

「いえいえ。ちゃんと抱きとめて貰えて助かったわよー。」

それでも少女はケタケタと笑っている。

「もう、そんなに笑うなよ……それより、早く宝石を見つけないと
いけないんじやないか？そろそろ夜が明けるぞ？」

「それもそうね。急がないと！」

夜が明けるのと同時にこのお城は無くなるのだった。それを忘れる所だった。俺達は……

#4 もして、また来年。

「何処から聴こえて来る？あの声は……」

俺達の仄かな光で何とか周りが見えてきた。

中世の鎧が何体も並んでいるこの地下。薄らぼんやりの明かりの下、それが今にも動き出しそうで不気味に感じる。

「こつちよ！」

少女は耳元に手を持つてゆき、的確にその声が聴こえる方角を指差した。そして、俺達は進んでゆく。

此処には、罠は無いようだ。有るのは、あの言靈。そして、終にあの言靈がはつきりと聴こえる場所に到着した。

そこは、アーチ状の石が積まれた部屋だった。ドアを開けると、中央に、石段があった。その上に、透明なガラスケースで覆われた七色に光る石らしき物が見える。

「あれね！」

少女は、我先にと言つた感じでそこへと進んでいく。

「おい！ 気をつけろよ！」

俺は嗜めるように言った。少し氣になる。確かに此処に来るまでに色々な罠が有った。が、地下に来た途端パタッと無くなつたのである。此処に来て何か有るかもしれないとそう思つたからだつた。少女がガラスケースを持ち上げたその瞬間。悲鳴にも似た声が劈いた。それが言靈の声だと、判つた。

俺達は、耳を塞ぎその声を遮断するしかなかつた。微妙にだが、この地下自体が揺れている。頭上から、埃やら砂やらがパラパラと落ちてきた。

「ケースを閉めろ！」

俺は叫んだ。少女は、言われた通りそのケースを宝石の上に被せた。すると、揺れや劈くような声は収まつた。

「どうすれば良いのよ…」

少女は、此処まで来たのに！と叫つ風にうな垂れた。

「何かこれを解く鍵は無いのか？」

「判らないわよ！」

結局どうすれば良いのか？俺達には判らない。暫く俺達は黙つたまま石段の上のケース前で立ち尽くしていた。

「俺達が此処に来た理由、それは、自分が何なのか？それを知るためだつたよな？」

原点に返るつもりで俺はそう言つた。

「そうよ。あなたが言い出したことじゃない！私は、あなたに付き添つただけ。興味が無い訳じゃなかつたからね。好奇心よー！」

「付き添つた？好奇心？それが問題なのかも……」

俺は、心を改めて今度は自分でそのケースを持ち上げた。すると、

「汝、光に属する者か？それとも闇か？」

声は、そう問い合わせてきた。悲鳴も搖れも起らなかつた。

「そんなことは判らない。俺は、自分が何なのか？それが知りたいだけだ！」

「……ならその宝石を取りたまえ。そして、最上階に行くのだ。そこで全てが明らかとなるだろう」

消え入る声に慌てて、

「ちょっと待つてくれ？この少女も一緒にお願ひしたい。彼女も、自分が誰なのか？判らないんだ！」

「お前が望むなら、それもよし。さあ行け！自らの宿命を持ちし者よー！」

今度こそ声は聽こえなくなつた。言靈さえも聽こえないシーンと静まり返つたこの場所。俺は言われたとおり七色に光る宝石を手に取つた。

次の瞬間、俺と少女を一縷めに取り巻くようにシャボン玉のよくな光が身体を覆つた。

「うわっ！」

「さやあつ！」

気が付いたら、その光の中に閉じ込められて上昇していく。天井まで届いた時、ぶつかると思ったが、その光はその天井を貫き、そして、さらに上層へと突き進んでいく。

気持ち悪いと思った。が、暫くすると高速で浮上していく為、景色はオーロラの様にキラキラと煌いていく。そこまでの不快感は無くなつた。

「これ！何処まで行くの～～！」

「最上階だろ！キミも来れて良かつたよ～！」

「悪かつたわね！お荷物で～！」

「荷物だ何て思つてないよ～もつと素直になれないのかキミは～！」

「これが私の性分なの！」

そんな会話もあと僅かかと思つと、何てことは無い。可愛いじやれ合いだつたなと思つ。

そう楽しかつた。

こうして会話できて、旅が出来て……
だから、

「ありがとう」

と照れながら呟いた。

「うわっ！何なの？それ一背中がかゆくなっちゃう～～！」

「何とでも言え！」

少女はケラケラと笑つていた。俺も思わず普ッと噴き出した。そして、俺達は終に最上階へと到着した。

最上階は、光の渦であった。地下とは正反対だった。真っ白な世界。目の前が眩しくて、これはこれで田を開けていられない。俺達は、

田を凝らしながら、何処に王冠が有るのか？それを探した。

「ちょとー何処に居るのよ？手でも繋がないと判らないじゃない！」

その言葉に、薄つすらと影らしいものが見えるそれを触った。少

女の細い肩だった。

「手、繫ごう！俺は此処だよ？」

俺達は少女の手を探り、少女も自ら差し出し手を繫ぎ、そして二人で王冠を探した。

この光の中だと、物と言つ物に影が出来るのではなかろうか？ そう思い眼を凝らす。

そして、歩き回る。何処がどこなのか？ それさえも判らない。でも、歩き回る。ただ、少女の手の温もりだけを感じて。

「ねえ、今幽かなんだけど、あそこに何か見えた！」

少女は、俺の手をギュッと掴んでそう言った。

「何処？」

「ちょっと後ろに戻つて、ほらあそこー。」

確かに何かがあるように思える。白に光の溢れるこの最上階に、一点の曇りが見えた。

「王冠つて、黒い墨みたいな物なのか？」

「知らないわよ……でも、あれじや無い？ そつとしか考えられないじゃない？」

俺達は、そこに向かう事にした。

近づいてくる影。それは、だんだん王冠の形に作られて、確かにそれが王冠なのだと一人して悟り、手を繫いだまま走り出した。

目の前には、大理石のようにすべすべした石の上に古びた金属と言つには程遠い、木の王冠があった。何とこの七色の宝石に似つかわしくない王冠。

「ほら、見つけたんだから、さつさと嵌める！ 多分この窪んだ所だと思つわよ。」

王冠の前頭部にそれらしい穴がある。俺はそこに手に握っている七色の宝石を当てはめようとした。が、途中で少女の逆の手を取り、と言つた。此処まで来れたのも少女が居たおかげだ。だから、俺

「一緒に嵌めよう。」

と言つた。此処まで来れたのも少女が居たおかげだ。だから、俺

はそう言つた。

「全く、これだからロマンチストは……」

「悪かったね？」

俺はそれでも一緒に行いたかった。

「これで最後よね？私達、多分離れ離れになるわ？でも、あなたの事ちゃんと覚えていいからね？」

「そう言つてくれると思ったよ？俺も忘れない……」

そして、スッと王冠に宝石を埋め込んだ。

その瞬間、辺りは星空に変わった。

そして、俺の思考に割り込む映像。

月が……あの青白い名を忘れた月が俺を見下ろしていた。

「此処にお帰り。キミは月が流した涙。本来此処に居なければならぬい存在。満月の夜に零れ落ちた欠片。だから、早くお帰り……」

星が瞬いている。月が俺にそう言つている。

「俺は、月だったのか……」

思い出した。毎夜この地上を見下ろしていた月。そして、彼女は

……月下美人。

夜にだけ咲くサボテン科の花。真っ白で美しく華やかな花。

この、晚夏に、ただ会いたくて俺は涙を流し、地上へと降り立つた。俺は、彼女に恋をした。そうだった。

「ただ会いたかったんだ……」

太陽が東の空から昇る。

今帰らなければ帰る事が出来ない。俺は、白んでくる空に浮かんまだままで地上を見た。少女が俺に手を振っていた。声は聽こえないが、唇が描いたそれは、

「また来年会いましょう。お月様？」

少女はスッと消え去つた。お城ももう、無い。

「また来年。会おう？か……」

俺は、フツと笑い、そして、ドンドンと上昇した。

太陽の光が、俺の姿を消していく。

「俺は太陽の光で存在をあらわに出来る月。影の存在。でも、姿は見える。そして、ちゃんと此処に居る」
ぼやけた思考の中、俺は本体である月と同化した。

闇は、光に憧れて、光は闇を宥めるが、その先には空と海のよう
に交わらない

何故かこの言靈が頭に流れゐる。だけど、それは心で打ち消した。
また来年、彼女に会えることを切実に祈りながら……

#4 もして、また来年。（後書き）

最後まで読んでいただき有難うござります。

簡単なお話でしたが、正体は、月と月下美人でした。
人間だけでは無い、この世の物に生命を吹き込んだ。
そんなお話を書いて見たかったので、書いた作品でした。次は、占
夢者でお会いいたしましょう^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9650d/>

永久の光～失くした記憶～

2010年10月8日15時33分発行